

記録

網と網げんか

— 漁村羽出浦の生態 —

賛助会員 安部 弘 古衛 門

今回は、都市や農山村の方々に、網についてのことをお知らせ申しましょう。まず主女網の種類について解説いたしましょう。

小引網

小引網は一名を「大網」ともいい、普通は、いわし・あじ・さば・かつおなどを取る目的の網ですが、しび(大狸のまぐろ)もこの網で取れます。しかしこの場合は、最終に「内引き」という丈夫な糸で編んだ網を使います。

体重が二十キから百キもあるくせに、しびは性質が臆病であるのか、網目が一咫もあるいわし網、つまりこの小引網で引いて、終りに内引きで取ります。

ぶり網

ところが、そのしびよりもうんと小さいぶり位しかないぶりば、敏しように泳ぎまわり、網目いっばいの魚体で平気で脱けて逃げる。それでぶりば網では取れないものとし、一本釣り釣るだけでありました。

ところが、明治十年代に羽出浦のいわし網(小引網)にぶりがかかったので、坂本徳松・今津音蔵の二人の網元が研究し、ついに完全な、専用のぶり網を完成しました。ぶりの前身であるはまちも、糸ばかりで作った網でとるようになって、豊漁がつづきました。今はぶりの大群の回落が少なくなり、さっぱりです。

小鰻網

これは別名を「がせ網」といい、主として夜間あじを取るのを目的としていました。また、しび等を漁獲することもある。

しかし、これら魚群が沿岸近くを回落せぬようになり、また漁具・漁法も改良されたので、小引網や小鰻網は、すでに過去のものとなってしまいました。

次に、網げんかのことを紹介しましょう。古来漁師は純情で人柄がよく、負けざらぬのでありすから、漁場では時々網船と網船の間で、大げんかを起こします。原因は、大い網代の使用権の争いからで、話がもつれて解決困難となります。その網の親方やムラギン衆と話し合い、場合によっては有力な他の網親に急行して買って、仲裁によって解決します。(注：ムラギン網船の指揮者)

しかし網船の乗組員は血気盛りの壮年者、負け嫌いの中年層も多いので、解決はなかなかでありません。

例をおげると、魚群発見、しかし網代に本番に当たる網船が来ていないと、急いで火をたいて狼煙をあげる。待機していた船はそれを見て現場に急行する。そんな時網船は勢いばげしい押合い、競漕となり、いよいよ接近して船々相摩すという時点でけんかになるのです。

また押合いでなくとも、相手の船が舳先を横ぎったらいっ軸を切った」というのでけんかです。

突発した争いで、有りあわせの石の投げあい、木棒、旗やお、こん棒などをなぐり合いで、怪我人が出たり、網船をいためることもありました。

こんなこともよくあった。魚群突然の発見に、本番の網船が大急ぎで近づきつつある。ところが現場近くにはい

友別の船が網をいれようとしている。急行している本番の網船からは手を振り声をあげて制止するが、聞き入れずに網で魚群を囲んで操業をつづける。怒った本番網の漁夫たちは、水棹や木棒で網の浮樽を片っ端から打ち破り、または魚籠の部分を上塗り上げたり、時には船を網代の真中に乗り入れて、錨をおろして魚漁を妨害する。これでけんかば全く成立するわけです。

こんな時、相手の網がすぐに破れ入れば、または有力者が仲裁に入って、漁獲高を四分六分が、又は七分三分で配分するということが解決することもあり、これを「わけ」と名づけていました。しかし時の勢いで、双方共話し合い無用と、直接行動に出ることもありました。

大きな石がとび水しぶきをあげる。水棹も旗も音が振りまわされる、大きなかぐら棒や前か、棒が音をたてて、船といわず人といわず叩きつけられる。怪獣人は出る船はこわれる、いや大変な騒ぎとなります。

私がまだ十歳にならない幼年の頃、ある日の夕方、いと、浜辺の広場で遊んでいると、村の主婦達の一団が、家々から灰を貰い集めては大小の樽につめ、網船の定錨場の方にどんどん運ばれていきます。

人々の話では、時は隣浦の網と大喧嘩だという。「灰をまくのはよいが、こつちが風上にあつた時にまかぬと駄目なぞ」と年寄がはげます。まだほんの子供であつた私は、珍らしいもの見たさに程遠い海岸まで見に行つたが、多人数の苦い人たちが大きな漁船に、灰をつめた樽や、手頃の石、棍棒、竹竿などを、次々に積みこんでいました。

その翌る日、入り乱れての網船か、派出に行かれましたが、ぐわしくは知りませんでした。

この話は今から八十年程昔のことでありますが、後になつて村の故老から、何段もそのことを聞きました。

その翌日、双方の網船は沖令で出合い、こちらほうまは風上に船をすすめ、聞いがはじまると直ちに大量の灰をおびせながら石の雨を降らせたり、どうにもならず自分の村さして逃げ帰った。

縁者に乗じた味方はその後を追ひ、灰と石で追ひ撃ちをかけたところ、向うは船を海岸に乗りすて、海岸に築き連ねている波除けの石垣の上に立ち並び、その辺りの石を盛んに投げ落してきた。一段高い城壁の上からの迎え撃ち、しかも大勢の老若男女が群がって石を運ぶ。味方の矢玉は尽きてくる。残念ながら引きさかり沖令に潜ぎ出して帰港することにした。——と、大体こんな話でありました。

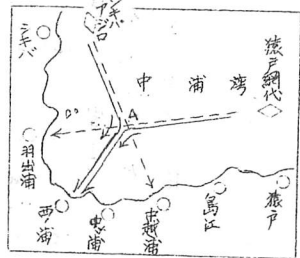
その後、この種の網船かかくり返され、たぐさんな重軽傷者を出したこともあつたが、このような争いさくり返さないため、未然に防止するためにも、抽選による網代定めや、その他の協議は、漁村には欠ぐことの出来ない、大事な事柄でありました。

こういうこともありました。大正も終りの頃であつたか、もう昭和の初めであつたか、とにかく其の頃のある日、二帖の小引網船が、激しい櫂声をおげて、船先をそそえて、沖合いから西野浦の湾内に潜ぎ込んで来た。村の人たちはいち早くこれを見つけ、「そら、大船のせり合いだ、皆出て見よ」と知らせたので、皆浜に出で見守りました。

二艘の網船は、互いに船先を並べたまま、立岩と戸外崎の中間の磯に向つて潜ぎこみ、やつと潜ぐ手を止めた。

しかし、櫓は立てたままですの、船の軸先は磯辺の岩に乗り上げました。瞬間、無気味な緊張が破れ、互いに激しい口論がはじまりました。

村ではこの様子を見て、これは東の網と下の網との大げんかになる、放っておいたら大変なことになる。早く収めねばというので両浦の網元と、村の有志とがすぐ現場に駆けつけて、仲裁にしようとめた結果、双方が網親方もムラギンも一忝これを了承し、網船の乗組員を去ため、大事に列らすけんかはや中止させることになった。しかし、事後の処理について、仲裁人たちははたと当惑しました。



もともとこの事件は、前掲の略図でわかるように、猿戸網代に出漁していた東網が、羽出浦に帰るのと、敷場網代沖から中越浦の下網と、偶然ハナノセ沖(A点)で出会い、双方共船先を切られまいと、潜ぎ抜けようとして押合いになつたわけでありませぬ。

双方共に目釣き達し得ない間に距離が縮まり、衝突を避けなからし押し勝とうと力漕し、あれよあれよという間もなく、双方共磯に乗り上げ、船先を切られることは双方共免れること出来ませんでした。

仲裁は成つたが困つたことに、羽出浦に帰る東の網が中越側に、中越浦に帰る下の網が羽出側の磯にある。磯から船を離してそのまま右左にというわけにはいかない。うっかりすると、どっちかが船先をきる、きられることになるし、それと反対に一方が変にゆづつて纏を横ぎれば纏を切られたことになる。双方ともなかなか譲らぬので、仲裁人達も困り果てた有様でした。陽は次第に西の山に傾き、話し合いは片づかず、四隻の

網船は依然磯辺で動かない。見守る村人が眼にも魚の糸が見られるようになりました。

最後に、仲裁人たちが指図して、双方の船を磯から離して沖に向かせ、沖合に潜ぎ出させつつその間隔をとらせて遠ざけ、さて合図して双方任意に居村に帰らせ、やっと落着いたが、それにしてはむづかしい問題処理でありました。

しかしこの処理も、事件の性質から考えると万全とはいえない難い。結局関係者が万策つきて協調した処置であつたと考えられます。

参考までに享保年間(一七一七-一七三六)羽出浦の網元の、記録に残っているのを挙げて見ましよう。

享保五年

鰯網(片手) 六帖

一帖 庄三郎

次兵衛

諸右衛門

長九郎

七郎右衛門

鰯網 四帖

一帖 庄三郎

次兵衛

吉兵衛

七郎右衛門

※時好 与 兵衛

(△印の三人は鰯網、鰯網共に持っていた)

享保十九年には、網元二、三の異動あり、鰯網三帖、小引網三帖と記され、それから百十七年後の嘉永六年には、小引網五帖、小引網三帖とある。網元の数がさほど増減かはしきくないようです。

明治以後は、今津音蔵・安部沢蔵・池田平太郎・坂本三津蔵・東兼蔵・大洪幸作・西岡政蔵・安部蔵太の網元が、次々と操業したがまた次々と転業し、今残っているのは坂本家だけのようである。

(おわり)